

29歳 俳諧師を目指し江戸へ行く
37歳 職業としての俳諧師を辞す
46歳 奥の細道の旅に出る
51歳 死去

GREAT LIFE

偉人の人生をのぞいてみれば

vol. 2

松尾 芭蕉

▶▶ Matsuo Basho

好きなことで身を立てた後、 仕事を辞して、 自らの理想を追求し続ける

好きなことは仕事にしたほうが幸せか？あるいは、しないほうが幸せか？その答えは個々の考え方や置かれた境遇によっても異なるものだが、好きなことで食べていくことは決して容易ではない。仮に仕事にしたとしても、好きであるがゆえに、様々な葛藤^{はいかい}に苦しむことはあるはずだ。

松尾芭蕉は俳諧で身を立てた人である。子どもの頃から好きだったことで道を拓き、才能を開花させ、人生の最後まですべてを懸けて理想とする俳諧を追い求めた。その先に、時代を超え、国を越えて人々の心に響く作品を残している。

▶▶▶ 30歳を目前に、俳諧師を目指し江戸へ

松尾芭蕉（幼名は金作。その後、俳号を宗房、桃青と経て芭蕉）は、1644年、伊賀国で農家の次男として生まれた。13歳の時に父が他界、19歳で地元の名家へ奉公に出た。

奉公先の藤堂家では跡取り息子の良忠に気に入られ、その世話役となった。2歳年上の良忠は俳諧をたしなんでいた。「俳諧」は和歌や連歌と同じ五・七・五・七・七の形式であるが、決まりごとの多い和歌や連歌と異なり、言葉遊びなど自由さがある。芭蕉が生きた江戸時代、俳諧は武士や町人にとって娯楽や芸事のような感覚で人気が高かった。子どもの頃から俳諧を作ることが好きだった芭蕉は、良忠と共に京都で有名な俳諧師に学ぶ機会を得る。

だが、そんな生活も長くは続かない。良忠が25歳という若さで亡くなってしまったのだ。芭蕉は実家に戻り兄の仕事を手伝っていたものの、好きな俳諧を仕事にしたいと江戸へ向かった。29歳の時だった。

江戸では、裕福な武士や町人たちが俳諧を作る句会をあちこちで開いていた。江戸で暮らし始めた芭蕉は積極



江戸時代、伊賀国（現在の三重県）出身の俳諧師。漢詩や古典を学びその影響も受けながら、芸術性の高い俳諧を数多く残した。「俳聖」として世界にもその名を知られる。

的に句会に参加し、そこで多くの同好の士と出会った。京都で学んでいた頃からすでに才能を見せていた芭蕉の俳諧は、江戸でも評判を呼ぶ。芭蕉のもとには弟子入りを希望する人が次々とやってきた。それまでは水道事業にかかわる仕事などもこなしていたが、33歳の時、俳諧だけで身を立てられる俳諧師となった。「好きなこと＝職業」になった瞬間だった。

▶▶▶ 37歳で自らが理想とする道へ

夢を叶えたはずの芭蕉だったが、次第に疑問を抱くようになっていく。売れっ子俳諧師となった芭蕉は、多くの句会に招かれた。そこで参加者たちの作品を寸評したり点数をつけることも仕事としていたのだが、それは本当に自分がやりたかったことなのだろうか。金持ちたちの道楽の相手をしているだけではないかと。

37歳で収入を得る職業としての俳諧師を辞めた芭蕉は、華やかな日本橋から江戸の外れの番小屋へ移り住む。多くの弟子に慕われていた芭蕉は、彼らのサポートを受け質素に暮らしながら、自らが理想とする俳諧を追求し続けた。

俗世を離れ、旅を続けながら多くの名歌を詠んだ西行法師に強くひかれていた芭蕉は、46歳の時、東北から北陸をめぐる旅に出る。先人たちが歌を詠んだ地いわゆる「歌枕」を旅する中で、あまたの名歌を詠み、『おくの細道』としてまとめ上げる。ほどなくして永眠。51歳。最後の作品からは、後に俳聖と呼ばれるようになった芭蕉の、人生を懸け、好きなことに打ち込んだ思いが伝わってくる。

「旅に病んで 夢は枯野を かけめぐる」

（執筆／ライター 篠田りょうこ）